

Costume and Textile

No. 13

服飾文化学会会報

2007年3月

第8回総会・大会のお知らせ

会員の皆様には既にお知らせを送付しましたが、2007（平成19）年度の第8回総会・大会は東京での開催となります。下記の通り、改めて御案内いたしますので、皆様には奮って御参加くださいますようお願いいたします。

開催日 2007年5月19日（土）・20日（日）

開催校 お茶の水女子大学

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

（東京メトロ丸の内線「茗荷谷」駅

または有楽町線「護国寺」駅より徒歩）

【研究発表】大学本館

【見学会】六本木「東京ミッドタウン」

【懇親会】茗溪会館 文京区大塚1-5-23

17:00～17:30 総会

18:00～19:30 懇親会

5月20日（日）

9:30～11:30 研究発表

13:30～16:00 見学会

六本木「東京ミッドタウン」探訪

◆六本木防衛庁跡地に3月末オープン of 東京ミッドタウン内の施設を巡ります。三宅一生の運営になる21_21Design Sight, およびサントリー美術館（開館記念展I「日本を祝う」）、そして1月にオープンした国立新美術館（「大回顧展モネ」）を見学します。塚田耕一先生の解説があります。

《プログラム》

5月19日（土）

13:30～15:30 研究発表

15:30～17:00 特別講演

「モダニズム期日本の工芸産業と女性：今井和子の留学体験と自由学園工芸研究所」

講師：菅 靖子氏（津田塾大学助教授）

◆講師プロフィール

菅氏は、日常生活に近い芸術表現を研究対象とし、近現代イギリス史、デザイン史が専門。東京大学教養学部でイギリス文化、表象文化論を専攻。英国ロイヤル・カレッジ・オブ・アートに留学。主著に『イギリスの社会とデザイン モリスとモダニズムの政治学』（彩流社2006年）

参加費用

大会参加費：会 員 3,000円

非 会 員 4,000円

学生会員 1,000円

学生非会員 1,500円

見 学 会：会 員・非 会 員 2,000円

学生会員・学生非会員 1,000円

懇 親 会：4,500円

昼食代（5/20）：1,000円

○第8回総会・大会実行委員会

実行委員長 徳井 淑子

お茶の水女子大学 服飾史研究室

Tel; 03-5978-5802

E-mail; tokui.yoshiko@ocha.ac.jp

会員の研究紹介

岩崎雅美編著『中国・シルクロード ウイグル女性の家族と生活』

(2006年, 東方出版(株)) について

岩崎 雅美



本書は2004年に発行した『中国・シルクロードの女性と生活』の続編で2003(平成15)年からの3年間の調査内容が中心である。

唐代に多くの文物が西域から奈良の都にもたらされたが、それらの地域は今やイスラム社会である。中国・シルクロードは特別の響きをもって日本人の関心と呼ぶが、イスラムに帰依した人々(ムスリム)に対する我々の理解は薄く、また砂漠・乾燥・オアシス・多民族などについても遠いイメージの世界のことである。

私共グループは中国・新疆ウイグル自治区のウルムチを拠点に、イーニン、カシュガル、アトシュ、トルファン、ハミ、ホータン、キリヤなどウイグルの人々が多く居住する地域を選び、雪だるま方式で縁故を頼って生活調査を広げた。夏、冬、断食期(ラマザン)など時期も変えながら、できるだけ多くの民家訪問を目指した。グループの専門は家族関係学、ジェンダー、服飾史・服飾美学、食物栄養学、住環境学、生活健康学である。

トルコ系の風貌をしたウイグル女性は服飾に殊の外意識が高く、服飾の伝統的な意味を多く残している。西洋服飾と同じに見える物も意味を異にする。装身具がその一例で、全ての指に指輪をはめ、炊事にも料理がうまくできるようにあえて外さない。多産の文様がピアスや壁面装飾などに今もみられる。シタン(下ズボン)とスカートの両用は、シャルワールを用いるパキスタンやアフガニスタンなどのイスラム社会と共通で、風土と宗教の両方に関連して重要である。髪が黒く多く生えるように0才から就学まで坊主頭にしたり、黒髪の手入れにある植物を利用することは、かつての日本人にもあった懐かしい習慣である。

『アパレル産業の成立—その要因と企業経営』

(2006年4月, 東京図書出版会) について

鍛島 康子



ここでは外衣を中心にして、第二次大戦後、既製服の商品となった紳士既製服、婦人・子供既製服、シャツ類、ニット・ウェアとその業界を主にとりあげた。服の種類をこのように扱った点に本書の1つの独自性がある。これにより「アパレル産業の全体像の把握」をめざした。資料は、業界新聞を中心にしつつ、政府などの実態調査、企業からの聞き取りなどを使用した。本書は1章と2章で構成されている。1章ではアパレル製造卸という業態が成立する背景を探り、2章では業界における企業の活動、とくにブランド戦略、製造のイノベーション、販路の拡大などにおいて先駆的活動をしていたいくつかの企業戦略の実態を調べた。

日本において、1960~70年にかけて既製服の生産・消費が増大した。その結果、1970年代初頭には、既製服化の遅れていた男子背広服、婦人ドレス・スーツにおいても消費のほぼ半分が既製服によるものとなった。そこで、1970年前後をアパレル産業の成立時点とみなし、その成立の要因を探ることにした。アパレル産業は製造卸業者の企画力に発展の基があった。次に、製造技術の開発について分析した。アパレル製品のJIS規格の制定は徐々に行われていたが、日本全体に普及するものが1970年につくられた。次に、アパレル企業の流通・販売について検討した。既製服を早くから扱ったのは百貨店である。有力アパレル・メーカーは百貨店に納入することが企業の発展の条件であった。その取引には委託販売方式がとられ、アパレル・メーカーに負担となったが、また成長のカギともなったことを指摘した。

日本のアパレル産業は、巨大な繊維産業の支配下にあり、また流通においても百貨店の支配にあったが、それらから脱して1970年までに有力メーカーを頂点として、アパレル産業が成立したと結論づけた。

(本書は、学位・経営学 東京経済大学の博士論文を自費出版したものである)

『色で読む中世ヨーロッパ』

(2006年6月、講談社選書メチエ) について

徳井 淑子



色は神の光りであると考える中世ヨーロッパの人々にとって、色彩は宗教的な意味においても、日常生活においても重要な意味をもった。すなわち色は生活世界で記号としての役割を担い、優れてコミュニケーション機能を果たした。中世の人々がどのような色を好み、また嫌ったのか、そしてそこにどのような意味を込め、また読みとったのか、色の意味と、その生成の経緯を、文学作品や写本挿絵の表象を通して知ることが本書の目的である。それは同時に色彩感情を通して中世人独自の感性を知ろうとする試みでもある。

赤、青、緑、黄、黒、そして中世を代表するミ・パルティという左右色分けのデザイン、いずれにも正負のイメージが同居する両義性あるいは曖昧性は、人間の感情の複雑さによるものとして片付けることはできない中世独自の心性に由来するように思われる。一方、赤を至上の色として好み、黄色や黒を醜悪で危険な色とした中世本来の色彩観が、憂愁観に裏打ちされた美しい悲しみの色として黄色や黒を評価する感性へと、中世末期に転換するさまは、近代的な心性の誕生を示しており興味深い。

中世人の色への関心を端的に示す著作に15世紀の『色彩の紋章』がある。その第一部は、フランス、ブルゴーニュ地方に生まれ、アラゴン王国の紋章官を務めたシシルの手になり、聖書や聖ヒエロニムスなど教会人、あるいは古代ギリシャ、ローマの記録に典拠をもつ伝統的な色彩の意味論、そして第二部は、15世紀当時の新しい色彩感情を多様な色名によって示した意味論である。ヨーロッパ文明の伝統的な色彩シンボリズムと、今日に至る近代的な色彩イメージの起源ともなる中世末期の色の価値とが、込み入った説明にもはっきりと刻印されている。ヨーロッパの色彩論の端緒ともなったこの著作を紹介することも本書の目的の一つである。

博士論文『桑沢洋子研究—デザイン教育の理念と活動—』について

常見 美紀子



私の博士論文『桑沢洋子研究—デザイン教育の理念と活動—』は、桑沢洋子(1910-1977)について論じたものである。

近代日本のデザイン運動は1930年代に始まった。その頃にデザイン教育の拠点となったのが「銀座・新建築工芸学院」である。学院は、バウハウス流の造形教育である「構成教育」を行っていた。これは戦前の普通教育における美術教育に普及し、戦後のデザイン教育の基礎となった。この学院に学んだ数少ない女性の一人が、桑沢洋子である。桑沢は、女子美術学校(現・女子美術大学)師範科洋画部を卒業後、学院に入学し(1933年)、バウハウスの造形教育と出会った。学院での学びと人脈が桑沢のすべての出発点となったのである。

本論文の目的は三つで、第一は、近代日本のデザイン運動における桑沢洋子のデザイン諸活動を明確にすること、第二に、桑沢洋子のファッション・デザイン理念を明らかにすること、第三に、桑沢デザイン研究所でどのようなファッション・デザイン教育が形成されたか、を明白にすることである。

第一目的である桑沢のデザイン諸活動は、編集者活動、デザイナー活動、デザイン教育活動、啓蒙活動という4つの活動があったことと、各活動の詳細を明らかにした。第二目的の桑沢のデザイン理念は、①近代デザイン思潮(機能主義・合理主義・量産)②ファッションにおける「日本的なもの」③民芸の「尋常美」④生活重視の思想⑤近代デザインと民芸の融合、という五つであったことがデザイン諸活動から導き出された。第三目的である桑沢デザイン研究所でどのようなファッション・デザイン教育が形成されたかについては、創立から10年間のカリキュラム調査の結果、1964年にはドレスデザイン科は「基礎造形」、「教養学科」、「ドレスデザイン」という三領域からなるファッション・デザイン教育システムを形成したことが明らかになった。この構成教育、デザイン理論および服飾表現・技術を分断しない優れたシステムにより教育効果を高めていた。

桑沢は、一貫して「デザインとは何か」というデザインの本質を探求し続けた。その結果、デザイナーやデザイン教育者として優れた業績を残し、近代日本のデザイン界に生きた桑沢の果たした役割は大きかったと言える。

この論文によって、筑波大学から博士(デザイン学)を授与された。なお、この論文の縮刷版が『桑沢洋子とモダンデザイン運動』(桑沢文庫第5巻)として近々発行される予定である。

2006 (平成 18) 年度 第 7 回論文発表会の報告



伊藤会長の挨拶

去る 2007 年 3 月 3 日 (土曜日) 午後 1 時より、東京家政大学 120 周年記念館 3C 教室において、2006 (平成 18) 年度論文発表会が開催された。

伊藤紀之会長の挨拶に始まり、卒業論文 7 件、修士論文 3 件の発表がなされた。参加者は 60 余名を数え、東京家政大学の皆さんの協力により、発表は滞りなく進行した。

発表論文の概要は以下のとおりである。

卒業論文

「火消の生き様と服飾美—火消装束に見る意匠的特徴—」を論じた西井論文は、江戸時代の火事装束が晴れの衣装であると同時に死に装束であり、火消し装束が勇気を奮い立たせる精神的役割を担ったことを指摘した。

白論文の「仁王像にみる人体美的表現について」は、日本の仁王像がインド・中国などの仁王の流

れを汲みながら、その怒りの表情や激しい動感に日本独自のものと化した。

「横浜開港がもたらした服飾への影響—幕末期におけるミシンの導入—」と題した大貫論文は、幕末期の横浜におけるミシンの導入と日本人が洋服の仕立てを学んだことが、明治以降の日本の洋装史上大きな意味を持ったことを明らかにした。

市嶋論文の「花森安治の衣服観」は、日本人の生活に根ざした洋装を理念とした花森安治の現代における評価に関する試論を展開した。

西村論文の「ナバホラグ—アメリカ先住民ナバホ族の手織りの文化—」は、アメリカ先住民ナバホ族のラグの歴史を検討し、産業と伝統の二つの側面を明らかにした。

「ファッションリーダーとしての Godey's とアメリカの女性の服装」をまとめた篠崎論文は、19 世紀アメリカのファッション誌『Godey's』を取り



発表会場にて

上げ、1860年代までの同誌の役割を論じ、アメリカ・ファッション史のいくつかの特性を捉えた。

大島・加藤・永井論文「マドレーヌ・ヴィオネの研究 —レプリカ製作を通して—」は、ドレーピングやCADを用いてのレプリカ製作を通して、ヴィオネの作品の技術の多くの部分を明らかにし、彼女のデザイン理念の解明に迫った。

修士論文

「江戸時代の小袖の素材と技法 — 富裕な町人と公家の小袖 —」を論じた高橋論文は、共立女子大学所蔵の公家と富裕町人小袖18領の形態、材質、染織技法を科学的に分析した結果、両者の差異や、模様と製作年代の隔たりなどの事実が見出され、保存・展示における重要な情報を得られたことが報告された。

鈴木論文「ファッション雑誌・広告からみる19世紀後半のフランスの子ども服」では、フランスの子ども服が1875年に登場した少女用のドレス以来、大人服から独立してゆく傾向が見られるこ

とを指摘し、そこに子ども服の概念の成立を見出すとした。

渡部論文「近代日本化粧史における山名文夫におけるデザインの役割」は、資生堂のデザイナーとして知られる山名の作品の経歴を追い、化粧史におけるわが国のデザインの過程を捉えた。

伊藤会長が開会の辞に述べられたように、発表者にとって、まさに「この発表会は終着点ではなく、ここからが始まり」である。若い学生さん達の今後の成長を大いに期待したいものである。

懇親会

東京家政大学120周年記念館1階多目的ホールで16時40分から行われた。蔵方宏昌副会長の司会で始まり、石井とめ子前会長の乾杯の挨拶の後、若い学生さん達を交え、歓談とともに交流を深め合い、18時に盛会のうちに散会となった。出席者は約50名であった。

(論文発表会担当 能澤慧子)

《2006 年度論文発表会プログラム》

展覧会から

13:00	開会の挨拶	学会長 伊藤 紀之
<卒業論文>		
(座長 小笠原 小枝)	13:05-13:20	
1. 火消の生き様と服飾美		西井 智美 (共立女子大学) 13:20-13:35
2. 仁王像にみる人体美的表現について		白 成美 (山野美容芸術短期大学専攻科)
(座長 鍛島 康子)	13:35-13:50	
3. 横浜開港がもたらした服飾への影響 —幕末期におけるミシンの導入—		大貫 敦美 (文化女子大学)
(座長 常見 美紀子)	13:55-14:10	
4. 花森安治の衣服観		市嶋 鮎子 (杉野服飾大学)
(座長 長崎 徹)	14:10-14:25	
5. ナバホラグ —アメリカ先住民民族ナバホ族の手織りの文化—		西村 恵子 (日本女子大学)
(座長 能澤 慧子)	14:25-14:40	
6. ファッションリーダーとしての Godey's とアメリカ女性の服装		篠崎 真由美 (実践女子大学) 14:40-14:55
7. マドレーヌ・ヴィオネの研究 —レプリカ製作を通して—		大島 智子, 加藤 杏子, 永井 里奈 (京都女子大学)
～ 休憩 ～		
<修士論文>		
(座長 佐藤 泰子)	15:10-15:30	
8. 江戸時代の小袖の素材と技法		高橋 さおり (共立女子大学)
(座長 伊藤 紀之)	15:30-15:50	
9. ファッション雑誌・広告から見る 19世紀後半のフランスの子ども服		鈴木 暁子 (日本女子大学) 15:50-16:10
10. 近代日本化粧品史における 山名文夫のデザインの役割		渡部 弘美 (東京家政大学)
閉会の挨拶		
懇親会	発表終了後	
120周年記念館1階 多目的ホール		

パリ日本文化会館で開催された「Katagami—Les pochoirs japonais et le japonisme (型紙とジャポニスム) 展」に関する報告

2006年10月19日(木)～2007年1月20日(土)まで、国際交流基金パリ文化会館において、「Katagami—Les pochoirs japonais et le japonisme (型紙とジャポニスム) 展」が開催され、会期中約15,000人の入場者を得ました。

この展覧会は日本女子大学の馬淵明子先生・文化女子大学の高木陽子先生と私の共同企画になるもので、ヨーロッパ・ジャポニスムの工芸的作品における日本の染型紙の影響を、ヨーロッパに流出した型紙と現地でそれらをデザインソースとして制作されたと推測される工芸品を比較展示することによって明らかにしようとしたものです。

ヨーロッパにおけるジャポニスムの表現様式の中には、すでに知られている絵画における浮世絵の影響以外に、特に工芸においては日本の染型紙の影響が強く見られることが、近年指摘されるようになってきました。実際、パリの装飾美術館には数百枚の、ハンブルクの工芸美術館には約2,000枚を超える、そしてウィーンの応用美術博物館には20,000枚もの染型紙が収蔵されており、私も2005年の秋には、これらの一部を実際に調査する機会を得ました。また、未調査ながら、これら以外にもさらに多くの染型紙がヨーロッパ各地の美術館や個人宅に収蔵されているようです。

この展覧会はそうした状況を反映して、ヨーロッパにおけるジャポニスムと染型紙の関係を明らかにしようとするものですが、ヨーロッパ人が染型紙に強い関心を持った19世紀末から20世紀初頭においてはもちろんのこと、また現代においても、必ずしもヨーロッパの人々が染型紙の実際の使用法や、それを使って日本でどのような染織品が作られたかを理解しているとはいえません。そこで展示の最初の部分では、一般には余り知られることのない染型紙についての理解と、型染作品の実際を理解できるよう、日本から小紋・中形・

紅型の型紙とそれぞれの型染作品を展示しました。展覧会の構成は、以下のようなものです。

1. 日本の型紙と型染め作品の展示

型紙は18世紀から19世紀にかけての紀年銘をもつ型紙を中心に、小紋と中形を時代変遷に沿って展示し、服飾品は、17世紀の武家男性の小紋染服飾品や18世紀の中形染狂言装束、また明治初期の女性の着物や琉球王府時代の紅型などを展示しました。

2. 西欧における型紙とその影響—ジャポニズムの時代の工芸—

19世紀、西欧では工芸運動が盛んになり、各地に装飾工芸を収集する美術館が相次いで開館しました。それらのいくつかの都市における工芸デザインへの染型紙の応用例を紹介しました。

- 1) オーストリアとドイツ：ウィーンとハンブルクの分離派
- 2) イギリスとアメリカ：グラフィックアートとテキスタイル
- 3) ベルギー：アール・ヌーヴォーの揺籃（ようらん）
- 4) フランス：アール・ヌーヴォーからアール・デコへ

なお、2009年を目標にこの展覧会の国内展を計画中です。実現の運びとなりましたら、またご報告いたします。

長崎 巖（共立女子大学）

インドの染織—世界を翔けたくぬの—

会期：2007・3月11日～7月8日

会場：平山郁夫シルクロード美術館

山梨県北杜市長坂町小荒間 2000-6

Tel 0551-32-0225

監修：小笠原 小枝

今年、日印交流50周年を記念して平山郁夫シルクロード美術館では、インド染織展を企画。展示品を織・刺繍・染の三パーツに分けて観賞して頂けるように構成してある。

インドはよく「染織の宝庫」と称される。実際



インド更紗 ピチャヴァイ 20世紀初期

そこには多様な素材、多様な技術を背景としたさまざまな染と織の永い歴史と伝統がある。しかも同じ一つの国土でありながら、その広さゆえに異なる風土と異なる民族によって生みだされる染織品には、一言で括りきれない奥行きと広さ、そして計り知れない深さがある。ヨーロッパの人々にとって、インド染織の魅力は東洋の香りとその信じられないような「熟練の技」にあると言う。しかし同じ東洋に大別される日本人にとってのインド染織の魅力はどこにあるのだろうか。

日本人とインド染織との出会いは実は非常に古い歴史が想定される。その第一の出会いは法隆寺に伝来する「太子問道」と通称される7世紀頃の「緋」。この数種の緋は飛鳥時代に大陸からもたらされたもので、製作地は今もって判然とせず、インドもまた候補地の一つに挙げられる。その理由は、アジャンタの壁画に緋文様の腰布を纏った女性が描かれていることによる。

第二の出会いは、ヨーロッパが大航海時代に突入した16世紀以降17世紀にかけて。この頃もたらされたムガル王朝の金銀糸入りの織物が、今日「名物裂」として珍重されている「モール」。その名称もムガル王朝の「ムガル」に由来するという。

第三の出会いは、近世以降、すなわちオランダ船が積極的に交易品としてインドの反物をもたらし

た17世紀以降である。なかでも日本で珍重され人気のあったインドの染織品の一つが更紗で、近世初期の風俗画には舶来した更紗をそのまま着物に仕立てて着用した若衆や女性の姿が描かれている。

日本に舶載されたインドの染織、あるいは近代まで未知であったインドの染織。そのどちらをとっても、インド染織が広く東西に運ばれ、それぞれの地に大きな影響を与えてきたことは確かである。それほど大きな影響力を持つインド染織の力は何処にあるのか。古くから交易品・輸出品としての役割を担ってきたインドの染織は、優れた専門の技術者を育て、その技術はカーストによる職業の世襲によってさらに鍛えられた。その一端をこの機会に鑑賞していただきたい。

小笠原小枝 (日本女子大学)

●夏期セミナーのお知らせと研究報告「私の服飾研究」募集

第8回夏期セミナーは次の予定で計画が進められています。

期 間：2007年8月、第2週の2～3日間

場 所：鳥取県倉吉市周辺

講 演：福井貞子氏(染織作家、染織研究家)

研究報告：若手研究者の研究報告

テーマ「私の服飾研究」(3題程度)

見 学：福井貞子氏の資料館、アジア博物館、弓浜緋工房など。

*若手研究者の「私の服飾研究」をテーマに研究報告を募集します。詳細は2007年度の総会・大会で配付される「第8回夏期セミナーご案内」をご覧ください。

(夏期セミナー担当理事)

*****事務局から*****

☆会費納入のお願い

今号に2007(平成19)年度 服飾文化学会会費(正会員6千円、学生会員3千円)の払込用紙を同封しました。5月末日迄にお振込み下さい。過年度未納の方もよろしくお願ひいたします。

☆新入会員

正会員

- ・内藤 千文 (2006年3月入会)
- ・谷 紀子 (2006年7月入会)
- ・笠作 奈樹 (2006年9月入会)
- ・林 精子 (2006年11月入会)
- ・濱田 雅子 (2007年3月入会)

学生会員

- ・高山 剛一 (2006年7月入会)
- ・難波 知子 (2007年2月入会)

学会誌に関するお詫び

先日刊行になりました『服飾文化学会誌』Vol.7におきまして、裏表紙見返し部分、編集委員のお名前に誤植がありました。「石井とめ子」先生であるべきところ、名字が「石山」と印刷されてしまいました。もとより編集段階では正しい原稿が出版社に渡されていたわけですが、最終的にこのようなことになってしまいました。編集委員長として石井とめ子先生、ならびに会員の皆様にご心よりお詫び申し上げます。また「研究論文投稿カード」も、本来裏白ページとして裏表紙前に挟み込まなければいけないところを、最終ページ裏面に印刷されてしまいました。これらにつきましては、すでにお手元にお届けした訂正用シート、及び別刷りの「研究論文投稿カード」を御使用頂きたく存じます。まことに申し訳ありません。重ねてお詫び申しあげます。

服飾文化学会誌編集委員長 長崎 巖

会報 No.13: 2007(平成19)年3月発行
 編集発行人: 服飾文化学会
 事務局: 〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋2-2-1
 共立女子大学 被服意匠研究室
 TEL, FAX: 03-3237-2496
 e-mail: isho@s1.kyoritsu-wu.ac.jp
 http://www.fukushoku-bunka-gakkai.jp



この印刷物は適切に育まれた森から生まれたFSC認証紙と環境にやさしい植物性大豆インキを使用しています。